海峡の英知。未来へ そして世界へ。

公立大学法人
下関市立大学
Shimonoseki City University

2019年11月1日　第89号
発行：下関市立大学広報委員会
〒751-8510 下関市大学町2-1-1
TEL.083-252-0288
FAX.083-252-8099
https://www.shimonoseki-cu.ac.jp/

2019年度オープンキャンパス

2019年8月オープンキャンパスの報告

教授　藪内　賢之
（入試委員長）

本年8月のオープンキャンパスを10日、11日に開催した。その頃、台風9号が宮古島の南西を通過した後に中国浙江省に上陸し、10号は小笠原諸島付近に停滞していた。このため、風は強く、蒸し暑かったが、2日間の参加者は1,180名であった。イベント別では全体説明1,003名、模擬講義940名、語学体験210名、小論文対策講座332名である。

全体説明は放送部の進行により、川波学長の挨拶で始まり、飯塚学部長、模擬講義講師による学科紹介、松本キャリア委員長、入試委員長の説明に続き、松山学友会会長はサークル活動などを説明した。個別相談ブースでは、入試、学生支援、教務、キャリア、国際交流に加え、生協学生委員による相談会を実施した。さらに、山川、山本、外枦保、奥山、松本（貴）、森（幸）先生による模擬講義、秋山、馬、白川、高路、田吹先生による語学体験、山本入試副委員長による小論文対策講座を実施した。加えて、大学生協職員は保護者に対して入学後の生活や大学生協などの説明をし、およそ5サークルはキャンパスプラザや体育館で日頃の練習成果を披露した。

特に、生協学生委員の皆さんは暑い中、参加者に対して笑顔で的確に応対し、キャンパス見学や会場誘導などで大きく貢献した。全員の協力により、今年のオープンキャンパスも事故なく無事に開催することができた。協力いただいた在学生並びに教職員に感謝する。

オープンキャンパスを振り返って

生協学生委員長　経済学科2年　浦杉　優人
（兵庫県立宝塚西高等学校出身）

私たち生協学生委員会は、大学生協の組合員である学生等皆様の福利厚生がより良くなるように日々活動している組織です。ここ数年で加入者が増加して規模が非常に大きくなりました。普段の活動は、大学構内にある生協ショップの飾り付けや、組合員と意見交換を行う一言カードの返信、生協ショップで提供される自家製弁当の箱であるリ・リパックの回収などを行なっています。今年は新たな取り組みとして下関市北東部に位置する豊田町で開催された豊田のホタル祭りに屋台の出店を行い、地域貢献の一端を担えるよう尽力しました。

オープンキャンパスでは、学生委員会は、将来的に組合員になる高校生たちの選択の幅を広げるため、主に大学構内を散策するツアー係と大学生のリアルな学生生活を伝えるブース係に分かれ、質疑応答に対応しました。また、2日間に及ぶ運営補助ということもあり、学生委員間での連携が必要とされたため、連帯感や団結感がより強固になったように思います。オープンキャンパスは、大学や学生の雰囲気を知るのに絶好の機会です。そのため、受験生は勿論、1、2年生の進路選択に私たち学生委員の言葉や態度が影響を与えることを意識して活動しました。様々な苦労がありましたが、高校生から帰り際にかけてもらった「ありがとうございました」の言葉はその苦労に見合うものがありました。

今後はオープンキャンパスで学んだ経験を生かして日々の活動をより積極的に取り組んでいこうと思います。

就職支援

充実した就職活動のために

教授　松本　義之
（キャリア委員長）

2019年3月末に卒業した本学学生の就職決定率は99.0%となりました。高い就職決定率は、2018年度に卒業した学生の就職活動への取り組みの成果が現れた形です。また、企業の高い採用意欲も後押ししたと思います。しかし、企業の採用意欲に若干陰りが見え始めています。経済情勢についても、米中貿易摩擦・消費税増税などで楽観視できない状況となっています。さらに、現3年生の就職活動から、経団連ルールが撤廃されます。政府主導で現状の経団連ルールを維持する方向となっていますが、就職活動の早期化に拍車がかかる可能性が高いと考えられています。

本学では、このような状況に対応するため、キャリアセンターを中心に様々なキャリアサポート体制を整えています。就職相談・エントリーシート添削・各種ガイダンス開催など、多岐にわたるメニューを用意しています。キャリア教育についても、キャリアデザイン・インターンシップ・PBLなど、充実したカリキュラムとなっています。

学生の皆さんにおいては、是非キャリアセンターを有効に利用し、充実した就職活動となるよう頑張ってください。自分自身が納得できる就職先を見つける事ができるよう、しっかり準備をして就職活動に挑んでいただきたいと思います。

アサヒビール株式会社に内定

経済学科4年　西田　勘佑
（広島県立広島国泰寺高等学校出身）

就活当初アサヒビールは、大手企業ということもあり、同じところを目指す高学歴の人たちには勝てないだろうと思っていました。しかし、就職活動を進めていくうちにアサヒビールしか入りたくないと思うようになり、反骨精神でエントリーシートと面接対策に取り組みました。

その中で私がやってよかったと思えたことが2つあります。1つ目は他人の意見や情報をより多く聞き出すことです。自分の意見だけでは偏った考えとなり、自己分析をうまく進められる人は少ないと思います。そのため、取り組みの1つとして、私は他大学の同級生やキャリアセンターの方に自己分析を手伝ってもらいました。その結果、自信を持って面接に臨むことができました。

2つ目は他人との差別化を図ることです。たくさんいる受験者の中で、いかに面接官に印象を与えられるかが大事だと思い、挨拶の仕方から工夫を行いました。また、他の学生がしないような経験に大学生活で取り組もうと意識してきたことが評価されました。

例えどんな企業が第一志望であってもしっかりと対策を練れば、可能性は十分にあると感じたので諦めずに頑張って欲しいと思います。

和歌山県庁職員に内定

国際商学科4年　山田　祥美
（和歌山県立日高高等学校出身）

私が就職活動を終えて感じたのは、日頃から自分の考えをもって物事に取り組むことの大切さです。

私が公務員の試験勉強を始めたのは、周囲の勧めが大きく、なんとなく勉強をしてみようかな、というぼんやりした気持ちからでした。しかし、公務員試験は専門の知識や幅広い分野の勉強が必要で、成績が伸びず、勉強をやめたいと思うことが何度もあり、なんとなく、という意思で続けられるものではないと思いました。その時、始めから自分なりにしっかり考えていればつまずくことも少なかったと思います。自分の意思を持って行動することは、なんとなく物事をこなすより意味を持って行動できるので、就職活動だけでなく、大学生活もより濃いものにできると思います。

最後に、就職活動で行き詰まり、悩んだ時のリフレッシュはとても大切だと思います。肩の力を抜いて、自分のペースで、自分の納得できる就職活動にしてください。

広島市役所職員に内定

公共マネジメント学科4年　和田森　麻美
（広島県立安古市高等学校出身）

私は、区役所でのアルバイト経験から、市民の方と直接関わることのできる広島市の職員を目指すようになりました。勉強面においては、何度も間違えてしまう問題や覚えづらい公式を一冊のノートにまとめたり、電車の待ち時間にスマホの単語帳アプリを活用することで暗記を進めていきました。面接対策では、できるだけ多くの人の意見を聞くように心がけました。民間・公務員問わず、面接で重視されるのは大学生活で何に打ち込み、どのような成果を上げたのかです。勉強が本格化する前の1、2年生のうちにサークルやアルバイトなど何でもよいので継続して取り組んだ経験があると、面接でアピールする核となる部分を作ることができ、面接が楽になります。

公務員を目指している人は就活の期間が特に長く、辛いと感じることもあると思います。そんな時はこれまで解いた問題集やノートを見てこれだけやったなら大丈夫だ、と自信をつけることが大切です。試験に向けて取り組んだ経験はこれからの人生においても必ず役に立つと思います。

就職支援

2019年度インターンシップの報告とお礼

准教授 菅 正史
（キャリア委員会副委員長）

本学では、キャリア教育の一環として、授業科目（単位認定）型のインターンシップを実施しています。本年度も、33の企業・団体に、58人を派遣することができました。各企業・団体の皆様方、なかでもプログラム内容の企画・社内調整や、実施・フィードバック等にご尽力いただきましたご担当者に、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

教育効果の観点からインターンシップを見ると、「参加した」という事実よりも、その経験をしたことで「何が変わったか」が重要と考えています。学生の皆さんには、事後学習等の機会に、自分が体験したことを思い返してみたり、そこにどのような「意図」が込められていたかと考えてみたりしてほしいと思います。若い時期の経験が、職業選択のみならず、これからの学習・思考・行動の貴重な糧（かて）となることを願っています。

これからもインターンシップをはじめ、本学の教育・研究活動にご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

インターンシップを経験して

経済学科3年 上村 梨緒
（宮崎県立宮崎南高等学校出身）

私は、株式会社鴻池組のインターンシップに5日間参加しました。このインターンシップに参加した理由は、建設業が地域創生や都市開発を通して貢献する以外にどのような方法で暮らしを豊かにするのかを学びたいと思ったからです。

主に、店内の事務作業を体験しました。建設業は、持続可能な開発を行うことで環境汚染防止に力を入れており、ただ開発やものづくりをするのではなく、作業環境に配慮することで、人々の暮らしを豊かにしていることが分かりました。営業の皆さんは、顧客目線で工事に対して分からないことがあれば事前に業者の方から説明していただいたことを自分の言葉で噛み砕き、親身になって顧客の方に接している姿がとても印象的でした。

業務研修を通して事務作業は、「縁の下の力持ち」ということが分かり、将来は、明確な目標を掲げ、ともに仲間と士気を高め合える仕事に就きたいと思いました。

海外でのインターンシップに参加して

経済学科3年 北川 諒
（筑陽学園高等学校出身）

私が今回インターンシップに参加を志望した動機としては、実際に現地に赴いて自分の眼で直接見て学び、将来海外でも通用するような人間になりたいと思った為です。シンガポールという経済発展目覚ましい異国の地で様々な異文化や価値観に触れながら仕事を行うことは、必ず自分自身の成長に繋がると考えました。

今回は約2週間の研修の中で、実際の会議に参加、社員や店舗スタッフの方々との英語でのコミュニケーション、アンケートなどの現地調査など絶対にここでしか体験できない貴重な時間を過ごすことが出来ました。そんな日々の中で感じたことは国際的な視点を持つことの重要性です。グローバル化の潮流に乗り遅れていては今後生き残っていくのは難しいと思います。

この機会は、自分の意識を変えるきっかけになりました。今回の経験を生かして、さらに成長していきたいと考えています。

鹿児島市役所のインターンシップを体験して

経済学科3年 寺戸 理美
（山口県立下関南高等学校出身）

私は夏期の長期休暇中に鹿児島市役所のインターンシップに5日間参加させていただきました。このインターンシップに参加した理由は、就職したい業種として地方公務員も視野に入れているからです。実際に業務を体験したり見学したりすることで、市役所職員として市民の方と向き合う姿勢など多くのことが学べると思い参加しました。

5日間を通して感じたことは、市役所というと窓口業務のイメージでしたが、その印象はガラリと変わり、企画や運営をしたり外出して管轄している施設を訪れたり、デスクワークばかりではないということでした。また、街の再開発やイベントの運営などの目に見える業務の他、私たちの知らないところで市民の安心・安全な生活を守る業務が行われているということを知りました。

今回のインターンシップでは、業務に取り組む姿勢ややりがいなどを教えていただいたことで公務員という職業への理解が深まり、興味深い職業だと改めて感じました。この貴重な経験を今後の就職活動に生かしたいです。

国 際 交 流

ルートヴィヒスハーフェン経済大学での留学体験

経済学科３年　滝本　峻永
（京都府立洛西高等学校出身）

ドイツでは、様々な国の人々が生活しており、共通言語としての英語の重要性が伝わってきました。宗教や文化の違いといった、日本で過ごしていると感じにくいことを感じることができました。英語で授業を受講することで語学力向上につながり、多文化を知ることが出来、いろいろな人と交流も持てました。実際、ルームメイトはトルコ人で、彼はあまり気にしていなかったが、豚肉を食べるということも気にする必要がありました。授業は、積極的に発言を行う学生が多いように感じられ、英語で経営を学ぶので、専門的な英語を身に付けるいい機会でもあったと思います。日本にいるだけではできない経験でした。

就職希望先が決まっており、そのために取るべき資格がある場合は、留学の価値と、資格取得の価値を検討する必要があるが、日本の企業が必要とするレベルの英語力は身に付けることができます。留学先でしか体験できないことも多く、視野や、考え方の柔軟性を身に付けるいい機会だと感じ、また、長期間海外で学ぶには、大学生の今がチャンスだと思います。

トルコ留学という選択肢

国際商学科4年　榎本　妃呂古
（徳島県立徳島北高等学校出身）

私の留学したボアジチ大学（トルコ・イスタンブール市）には、トルコ国内外からの優秀な学生が集い、日々勉学に励んでいます。そのような環境で過ごした約11か月間は、私の人生に色濃く残る素晴らしい経験となりました。トルコは私にとって未知の国であり、そこでの生活に強く興味を抱いたことがトルコ留学のきっかけでした。留学当初は日本の生活との違いに戸惑いを抱いたり、他の学生と自分の学力の差に焦りや不安を感じたりすることがありましたが、現地で出来たたくさんの友人の支えによって乗り越えることができました。また、トルコ国内の様々な地域を訪れ、個性豊かな文化や悠久の歴史を自分の肌で感じ、唯一無二の感動を覚えることができました。留学は、言語だけではなく、その地域の文化や伝統を尊重し新たな価値観を培う絶好のチャンスです。数あるなかで選んだトルコ留学という選択肢は、この先衰えることなく私を支えてくれるものだと思います。

カナダ派遣留学体験記

経済学科3年　鉄川　正尭
（神奈川県立追浜高等学校出身）

私は約8か月間、人口約8万人の田舎町スーセントマリー市（オンタリオ州・カナダ）のアルゴマ大学に留学しました。留学当初、学んできた英語が通じず入学初日でつまずいてしまいました。語学や初めての海外生活などで不安が積み重なり自ら進んで話しかけることも出来ず自信を失いかけていました。しかし、ホストファミリーやESLプログラム（英語を母語としない人向けの英語教育プログラム）の方々の温かいサポートもあり生活に対する不安が徐々になくなっていきました。私のクラスには中国、台湾、ブラジル、コロンビアなど様々な国からの留学生がおり授業外の時間に多く会話をするよう心掛けました。現在でも連絡を取り合う友人を持てたことは私の大切な思い出です。

今回の留学で自分の好きな事や母国を説明できるようになっておくことが相手と会話をする上で大切なことだと思いました。相手との会話が弾み、より深く相手を理解することができたからです。

このような海外での貴重な経験を忘れずに今後の学生生活に生かしていきたいです。

初海外はオーストラリア

経済学科1年　中山　伊吹
（山口県立長府高等学校出身）

大学1年生の私は、とにかく色々な物事に挑戦し経験することで、日々色々なことを吸収し学び、人として成長できていると感じられている今がとても楽しいです。外国研修に参加したのも、日本から離れた大きな世界というものを様々な視点で見て感じてみたいという私の好奇心から決意しました。英語の苦手意識をなくし、楽しく話せるようになりたいという気持ちも大きかった反面、初海外、初ホームステイという初めての環境ばかりで不安も同じくらい大きかったです。

オーストラリアは治安がよく、優しく明るい方が多く住んでいます。生活リズムも日本と近く、初めての海外にとてもおすすめです。語学学校では、日本語を話せない状況下にあることでリスニング力やスピーキング力、語彙力が自然と向上し、分からない英単語もさらに言い換えた英語で説明されるため、新たな発見がたくさんあります。ホストマザーと食事をしながら日本について語ったり、一緒にクッキーを焼いたりしたのも楽しい思い出です。観光先でもショッピング中でも学校でもホームステイ先でも、常に英語に囲まれて生活できる環境は海外でなければできないことだと思います。この研修は、異文化理解や経験ができる貴重な機会となりました。

国 際 交 流

外国語研修を通して

国際商学科2年 園田 千晴
（鹿児島県立川内高等学校出身）

外国研修で中国の青島市に行きました。最初は自分の中国語に全く自信が無く、お店の人やタクシーの運転手と会話しても何を言っているのか聞き取るのも難しかったのですが、経験が増えると少しずつ理解することができ、自分の話したい事も伝えられるようになりました。夜市で出会った地元の方と中国語で会話したり、学校で中国の友達と遊んだりして少し自信がつきました。また、生活するにつれ教科書で習った言葉は使わず、違う言い回しや現地の人が使う言葉なども少しずつ理解することができました。

文化の面でも日本との違いを感じることがたくさんありました。まず百貨店でもトイレにトイレットペーパーが無いことや流せないことで、日本の感覚でつい流してしまいそうになり困りました。また車がクラクションをたくさん鳴らすことも、日本ではあおり運転が問題視されているので驚きました。そしてキャッシュレス化が進んでいて現金を全く持ち歩かないことや料理に香辛料をたくさん使っていることも日本と違うところでした。

実際に現地に行かないと分からないことがたくさんあり、とても勉強になりました。これからは経験を生かし、検定などたくさん挑戦します。

外国研修に参加して

国際商学科2年 石丸 範佳
（佐賀県立致遠館高等学校出身）

東義大学校(釜山広域市・韓国)で2週間開講された語学研修に参加しました。私のクラスの授業はすべて韓国語で、他大学から参加した学生のレベルが高くて圧倒されましたが、友達や先生方のおかげで最後まで頑張ることができました。午後の授業は、東義大学校の学生がチューターとして一対一で付いてくれ、課題を手伝ってくれたり、話をしたりする時間で毎日充実していました。授業が終わると自由時間で、チューターさん達や友達と遊びに行くことが多く、現地の学生だからこそ知っているところにたくさん連れて行ってもらいました。日本ではできない体験をたくさんすることができ、とても楽しい2週間で「帰国したくないな」と思うほど充実した研修になりました。また、チューターとの会話も韓国語で、自分の思っていることが言えないことがあり悔しかったのと同時に、もっと話せるようになりたいと思いました。これからもっと話せるようになるために韓国語の勉強を頑張ろうと思います。

第2回日本文化の神髄を知ろう・酒蔵見学

国際商学科1年 曹 冬冬
（中国・山東省出身）

7月13日（土）に、「日本文化の神髄を知ろう!!～下関酒造で学ぼう日本の文化と歴史～」に参加し、日本酒の文化を視察し、体験し、学びました。

講義を通して、日本酒の種類、日本酒造りに必要となる米、お酒と料理の相性などについて色々と面白い話を聞きました。次に4種類のお酒で利き酒をしました。日本酒が好きなので、飲み比べることが一番の楽しみでした。利き酒の後に酒造りの機械や酒蔵の樽も見学しました。普段見られないところを見せていただき、とてもいい勉強になりました。また、下関酒造の歴史や今の商品について説明を受け、日本酒には長い歴史があり、昔から日本では米を原料にお酒を造っていたことがわかりました。

見学が終わった後、ひれ酒を買いました。2年前先輩から下関のお土産としてひれ酒をもらい、初めてひれ酒を飲みました。今回この時にもらったひれ酒を造る会社を見学することができ、日本文化への理解を深めることができてよかったと思います。日本酒の歴史にも興味を持つようになりました。これからももっと日本文化を体験しようと思います。

「日本にいながら世界を知ろう」ベトナムのこと知っていますか

国際商学科3年 レー・ティー・ホン・ニュン
（ベトナム・タインホア省出身）

私はベトナム出身です。7月12日（金）に開催した各国の留学生が自分の国のことをみんなに紹介するイベント「日本にいながら世界を知ろう!!」にて司会を務めさせていただきました。今回のテーマは「僕らの国ベトナムについてお話しします!!」でした。発表者はベトナム出身の1年生グエン・バオ・ソンさん、ゴ・ディン・クアン・ニャットさん、トン・バン・タンさんでした。発表内容は主にベトナムの歴史、地理、文化などについてですが、特にみんなの気になる食べ物と観光地も詳しく紹介されました。参加者は学内の先生方や学生などベトナムに興味がある方がたくさんいらっしゃいました。みんなはベトナムのコーヒーとドライフルーツを食べながら発表を聞いたのでとても暖かい雰囲気でした。発表の後は質疑応答の時間でしたが、質問者はベトナムに興味を持つようになって色々質問してきました。発表者の3人も一生懸命自分の知っている知識で答えました。最後は時間がなかったので全部の質問に答えられなかったのですが、みんな満足して帰りました。今後ベトナムだけでなく、他の国のことも様々紹介されますのでお楽しみに !!!

下関市立大学News&Topics

馬関祭を終えて

第58回大学祭実行委員長　経済学科3年　上別府　隼都
（宮崎県立小林高等学校出身）

初めに第58回目の馬関祭を無事に開催できましたことを、ご協賛いただきました企業、団体の皆様、ご指導を賜った教職員の皆様、そしてなによりご来場いただきました皆様に感謝申し上げます。

私たち下関市立大学大学祭実行委員会は、総勢250名で馬関祭の企画運営をしてきました。馬関祭の準備だけではなく、市内の様々なボランティアにも数多く参加させていただいており、地域の方々と深いつながりを持つことで、祭りの運営のノウハウや、行事、企画等の組み方など様々なことを学ばせていただきました。

今年の馬関祭は10月12日から14日までの期間で開催いたしました。台風の関係もあり予定していたお笑いライブ、アーティストライブは中止せざるをえなくなり、楽しみにされていた皆様には大変ご迷惑をお掛けしました。しかしそのような中でもご来場頂いた皆様をはじめ、多くの方が一緒に馬関祭を盛り上げてくださり、笑顔で我々の企画を楽しんでいる姿を見ることができ、実行委員会一同1年間の活動を思い出し、涙を流しました。

大学とは自分の志次第で大きく成長できる場所であると思っています。私はこの1年間、実行委員長として活動してきたことを誇りに思います。また、一生忘れることのできない経験であったと思います。是非大学生になった皆さんも志を高く持って、意義のある大学生活を送っていただきたいです。

春学期卒業証書・学位記授与式

9月30日（月）、2019年度春学期卒業証書・学位記授与式が挙行され、今年度は、経済学科12名、国際商学科12名、公共マネジメント学科2名の計26名が本学を巣立っていきました。学長は告辞の中で、「社会人として生き抜くための知識やアイデアを増やし、鍛えるための勉強は今後ますます重要になってきていると言えます。本学においてこれまで培ってきた勉学の方法にさらに磨きをかけ、時代を生き抜いていくための実践的勉強をさらに継続していってほしいと願う。」と述べました。本学は、全国各地あるいは世界で活躍する皆さんを、下関から応援しています。

2019年度防災訓練の実施について

9月26日（木）に、学生、教職員及び地域住民の約150名が参加し、防災訓練を実施しました。訓練には、地元大学町自治会の住民の方も参加されました。本学自衛消防隊の活動終了後、屋内消火栓を使用した放水訓練を実施し、水の勢いを体感しました。次に水消火器を使用した消火訓練をしました。経験がある人もいましたが、消火器の扱いに戸惑う場面もありました。消防署員からは、日ごろからの火災予防策として、家の中の整理整頓が紹介され、一般的に家庭内が散乱している家庭では、火災が起こりやすいとのことでした。また、学生の皆さんは、学内にどのような設備があるのかを再確認しておいてほしいとの指導がありました。

国際交流会ともだちの一大イベント～世界の厨房から～

国際商学科3年　五嶋　優馬
（下関商業高等学校出身）

「国際交流会ともだち」は、毎年、「世界の厨房から」にお越し下さった方々へ留学生と共に故郷の料理を振舞っています。今年は、韓国、タイ、ベトナム、中国、トルコ、日本の料理を作りました。留学生からレシピを教えてもらい、少しでも本場の味に近づけるように味付けや調理の工程などを工夫しました。また、日本舞踊のお披露目もあり、世界各国の文化に目を向けて頂くことができたと感じています。

私たちは、本学留学生と本学学生の接点を多く作りたいと望んでいます。興味がありましたらぜひご来場ください。来年の「世界の厨房」でお待ちしています!

地 域 交 流

地域インターンシップを体験して学べること

国際商学科3年　坪根　拓哉
（福岡県立育徳館高等学校出身）

地域インターンシップの一つに農業体験ができる「援農隊」というものがあることを聞き、農業に携わってみたいと小さい頃から思っていた私は、この活動に参加してみることにしました。種まきや田植えなど実際に田んぼの中に入って、農家の方々に教えていただきながら作業するのは、自分にとってはとても新鮮でした。地域づくりに関して農家の後継ぎ不足や高齢化などを学んできたのですが、こうして自分の手で行うことで、少し主体的に農家のことを考えられるようになりました。農業は体を使う作業なので、高齢者にとっては大変です。でも、自分たちで育てた野菜を収穫できる喜びはとても魅力的だと思います。だからこそ、その魅力を若者たちに伝えこれからの農業を担う人材を育てるうえで、こうした活動に参加できる場があるのは、とてもいいことだと思います。説明だけではわからないことを地域インターンシップに参加することで多く学ぶことができ、とても良い経験になりました。

下関くじらサマースクールを開催しました!!

本学が誇る「鯨資料室」の資料や資源を生かした地域貢献の一環として、2018年度から開始した附属地域共創センター主催の「下関くじらサマースクール」を、7月27日（土）に開催いたしました。このサマースクールには、下関市内在住の小学生26名と保護者17名の参加があり、キャンパスは元気な子どもたちの声に包まれました。

講義は、最初に下関鯨類研究室長の石川創氏より「クジラってどんな生き物?」が、続いて本学委嘱研究員の岸本充弘氏より「下関とくじらの歴史について」のお話があり、くじらの歯やヒゲの実物を触ったり下関の身近なお話に、非常に興味を持っていただける内容となりました。その後、本館Ⅱ棟にある鯨資料室や、学術センター1階のイワシ鯨頭骨、捕鯨母船模型の見学も行い、最後に、アーカイブ部門長の松本准教授から参加者1人ずつ修了証書を受け取りました。このサマースクールを自由研究の課題とするお子様も多く、メモを取る保護者の熱心な姿が非常に印象的でした。

2019年度関門地域共同研究会・成果報告会を終えて

附属地域共創センター長　柳　純

本研究会は、本学と北九州市立大学との共同研究会として1994年からスタートして、今年で25年を迎えようとしています。関門地域のあらゆるテーマに関する学術的研究成果の発表の場であると同時に、今日では地元の企業、自治体、そして両大学に所属する学生までをも巻き込んだ成果報告の貴重な機会となっています。今回は、7月25日（木）に西日本総合展示場新館（AIMビル）314･315会議室にて、関係者を含む50名弱の方々にお越しいただき開催することができました。

まず第1部では、2018年度に実施された関門地域共同研究「高齢労働者による地域支援活動への意識に関する研究―山口県の事例をもとに―」（本学経済学部教授　難波利光氏･北九州市立大学基盤教育センター准教授　坂本毅啓氏）と「日本遺産『関門“ノスタルジック”海峡』認定後2年間の現状分析」（北九州市立大学地域戦略研究所教授　南博氏）の2件の報告がなされ、その後に質疑応答がありました。

続いて第2部では、「関門地域における“文化財を活かした地域活性化”の可能性」と題したシンポジウムを開催しました。5名の登壇者によるパネルディスカッションでは、それぞれの立場から、関門地域の文化財、関連する観光の特徴や魅力、活動状況について話されました。そして最後に、日本遺産を有する関門地域での関わり方や今後の地域活性化への取り組み、課題等の意見交換がなされました。

私のゼミ　連載企画

自分らしさを発揮できるゼミ

経済学部３年　藤田　瑞希
（鹿児島県立加治木高等学校出身）

三科ゼミでは、固定された分野ではなく学生自身が関心のあるテーマについて幅広く研究を行います。そのため、今のゼミ生の研究内容も鉄鋼産業の盛衰、女性や外国人を取り巻く労働問題、現代の震災対策など多種多様なものとなっています。

今興味のある分野が分からず、卒業論文の方針が定まっていなくても、他のゼミ生の様々な報告を聞く中で、段階的に自分の興味のある分野を探すことが出来るため、心配ありません。

実際のゼミ活動として、3年次にはテキストの輪読や興味のある学術論文を取り上げてゼミ生に報告することで 正しい論文の書き方や伝わりやすい文章の書き方、プレゼンテーション力など技術的な能力を培います。

また、報告後は先生とゼミ生を交えた意見交換を行うことで、他の視点からの新しい切り込みや、さらに報告内容をよくするための改善点を学ぶことができます。

温かく的確な指摘をしてくださる先生と個性的なゼミ生で和気あいあいと活動しています。

これから本格的に卒業論文の執筆が始まりますが、ゼミで培った能力を糧に納得のいく卒業論文が完成するように頑張っていきたいです。

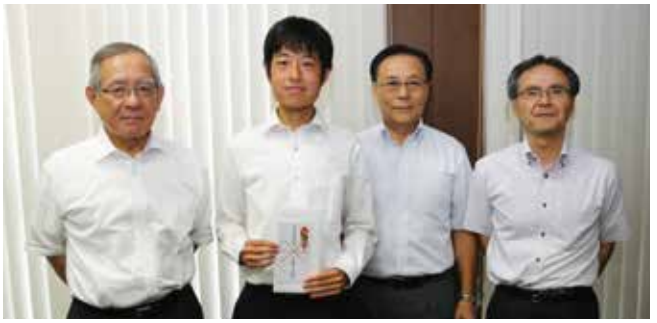
2019年度 春季～秋季 大会等成績

サークル名	大会等名称	個人名	成　績
男子バレー部	中国大学バレーボールリーグ戦　春季大会（1部）		6位
準硬式野球部	中国地区大学準硬式野球春季1部リーグ	丸林賢史郎	最多勝利投手
		榊原雅仁	打撃10傑
		亀田裕希	ベストナイン
フットサル部	2019年度全日本選手権山口県大会		準優勝
硬式テニス部	北九州・下関地区大学体育大会　男子団体		準優勝
	北九州・下関地区大学体育大会　女子団体		準優勝
	北九州・下関地区大学体育大会　男子ダブルス	野村伊織、森田泰久	準優勝
	北九州・下関地区大学体育大会　女子ダブルス	西村彩、松下明花	準優勝

全国大会出場

ソフトテニス部 新郷　武
2019年度 第61回 全日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会　8月9～10日

弓　道　部 東康平、宮﨑幸椰
第67回 全日本学生弓道選手権大会　8月14～16日



■ 2019年7月～10月　行事記録

7月10日 世界の厨房から
25日 関門地域共同研究成果報告会
大学院中間発表会
FDワークショップ
27日 下関くじらサマースクール
8月 1日 春学期定期試験（～9日）
10日 オープンキャンパス（～11日）
10日 夏季休業（～9月26日）
20日 春学期卒業論文提出締切
9月 7日 大学院入試（一次募集）
10日 大学コンソーシアム関門（～13日）
21日 保護者懇談会
26日 防災訓練、秋学期履修登録開始
27日 秋学期授業開始
29日 ミニオープンキャンパス
30日 春学期卒業式
10月 7日 学生健康診断（～8日）
12日 大学祭（～14日）
15日 大学祭片付け（全学休講）
クリーンキャンパスデー
23日 履修登録取消期間（～29日）
28日 後期授業料納入期限

■ 今年度の入試スケジュール

【推薦入学・特別選抜・第３年次編入学】

試 験 日	2019年11月23日(土)
出願期間	(推薦・特別) 2019年11月1日(金)～11月8日(金)
	(編 入 学) 2019年10月17日(木)～10月24日(木)

【外国人留学生】

試 験 日	2019年12月21日(土)
出願期間	2019年11月28日(木)～12月6日(金)

【一般選抜（前期日程）】

試 験 日	2020年2月25日(火)
出願期間	2020年1月27日(月)～2月5日(水)

【一般選抜（公立大学中期日程）】

試 験 日	2020年3月8日(日)
出願期間	2020年1月27日(月)～2月5日(水)

●お知らせ

2020年度入試から、推薦入学試験及び一般選抜において、インターネット出願を導入します。従来の紙での出願受付は行いません。
※特別選抜、外国人留学生選抜、第3年次編入学は、従来どおり紙による出願となります。

名誉教授 称号授与式を行いました

2019年6月20日（木）、本学大会議室において本学名誉教授称号授与式を行い、本年3月31日付けで退職された櫻木晋一氏、濱田英嗣氏及び横山博司氏に名誉教授の称号が授与されました。長きに渡り本学の教育や運営にご尽力をいただき誠にありがとうございました。

連載企画

自著を語る

『労働運動を切り拓く ―女性たちによる闘いの軌跡』
（共編著、旬報社）

教授　萩原　久美子

男女雇用機会均等法が施行され30余年。施行までの道のりは一般に制定に関わった旧労働省女性エリート官僚の物語として語られる。だが、真の原動力は労働運動に集結したノンエリートの働く女性たちであり、1970年代から80年代にかけて全国に広がった男女雇用平等法制定運動だった。

本書はこれまで検証がなされてこなかった男女雇用平等法制定運動に焦点を合わせた。中心となるのが女性リーダー12人へのインタビューを再構成した「聞き書き」である。2年半に及ぶインタビューと史資料の検証を通じて、職場で悩み苦しみながら、果敢に決断し、実践してきた女性一人一人の経験を今に伝える。「聞き書き」を理論的に理解するために運動の歴史的意義や現在に引き継がれた課題についての解説、論文、年表、資料も収録した。これからの労働を考えるテキストとしても役立てていただきたい。